中國地方の鍛刀工業

（刀劍地理的研究第三稿）

小川琢治

日本鍛刀工業の歷史を觀るに奧羽の鐵鑛產地に先づ大に發達し、是から大和に傳はり更に西方の中國の砂鐵鑛床ある播磨伯耆三備の地方に傳はつて、日本に於て最も盛んな鍛刀工業が成立した。

中國地方の最も古い刀工として鍛冶系圖に記載されたのは伯耆の安綱で、大同又は弘仁（八〇六乃至八二三年）頃となつてゐる。山陽道の側では之より遙かに後れて備前の實成友成が永延（約一〇〇〇年）頃に出で、包平照平高平の三平でも古正恒助包でも略ぼその前後となつてゐる伯耆は大山といふ修驗道の靈地があるから、若し出羽の月山と前後して開けたものとすれば、此處にも古く刀鍛冶があるのは容易に理解される。我々は月山に友則安則といふ奈良朝の刀鍛冶を銘文で發見したから、安綱は此の系統に屬するもので修驗道と關聯して早く此處に移住して中國鐵鑛產地の鍛刀工業の鼻祖となつたらうと考へた。（本誌三卷四三四頁參照）

然るにその後隱銘に左の如き播磨の安賴の銘文のあるのを發見したので、中國鍛冶の系統は稍明かとなつて、播磨が最も古いことになつた。

延曆四年乙丑六月朔甲子播磨國小川住大原忌寸安賴燒之、同年月日伯耆國住人大原忌寸安綱鍛之

他の多くの場合に安綱は弘仁年間の紀年銘が見られるのと併せ考ふれば、安賴は延曆年間に播磨國府の附近小川に住居した鍛冶で、安綱と

同じく大原を姓とし、多分安綱の父か兄であらうと想はれ、近畿に隣接して砂鐵の供給に近い播磨に先づ刀鍛冶を出したと想はれる。

播磨に名工のゐたことは小烏丸の傳說（平家物語、劔卷）でも明かであるに關らず、從來の鍛冶系圖に載せた播磨刀工年代に非常な異同があつて、古刀銘盡其他諸書には大抵安頼一派を鎌倉時代とし、家村（永延頃宍粟郡住人）家時、助時（家時の子）の三人だけを平家朝と看做し、唯鎌田魚妙の鍛冶考のみは萬治系圖に據り、安頼を祖とし寛和（九八五）その子角國を永延とし、父子共に大和から移住したとある。銘文が正しいとすれば安頼を平安朝以後に引き下げるのは約四百年の相異で大に誤つてゐるのみならず、之を永延前後としても尙ほ約二百年は誤つてゐる。

此の小川といふ土地は飾磨郡に屬し、今の姫路市と市川を隔てゝその東に位し、姫路は古の國府所在地であつて、その負郭の地として古く聚落を成したらしい。和名抄の鄕名中に此の名を載せぬが播磨風土記にはもと私里（サツイチノサト）と呼んで私部弓束（ユヅカ）等の祖田又利（タタリ）君鼻留（ヒル）が居たので起り、後に小川里と改めたとある。その移住年代を志貴島宮御宇とし、その改稱を庚寅年としてゐるが、志貴島宮を欽明天皇とすればその庚寅は卽位三十一年（五七〇年）に相當するが、年代の古いといふ以上の正確は期し難く、又た必要もない。此の聚落は勿論その四近の聚落も何れも移住者の作つたものたることが風土記地名語源の說明から明かである。

蝦夷人卽ち所謂俘囚を中國の各地に置いたことは歷史に見える所であるが、播州小川の刀鍛冶が同じく俘囚なることは前に揭げた銘文の外に篆書及び楷書で

俘囚臣安頼奉獻之（又は奉造之、奉燒之）

とあり、角國にも同文が見える。前稿舞草鍛冶を俘囚として述べた後に、豐浦宮（推古天皇）改元何年といふ銘文を伴ふ陸奥國俘囚臣千伊なるものゝ隱銘を發見して確實となつたが、その他の刀工も大抵俘囚臣某と隱銘に切つてることが發見された。故に中國刀工中の最も古い銘文を

殘したものは同じく奥州から來た移住者で砂鐵の產出する宍粟郡千種（チクサ）の原料を直に利用したと想はれ、チクサは今のアイヌ語で「輸入の」意義を有し、或はこゝに持て來た鐵鑛を「チクサカネ」と呼んだのから地名が起つたらしい。

安頼と殆んど前後して出た伯耆安綱も、前に掲げた隱銘で發見した所によれば安頼の相槌を打つたと想はれ、安頼と同族で伯耆の砂鐵產地を開發したものらしく、安綱は鍛冶系圖に或は大同（八〇六）或は弘仁（八〇九乃至八二三）となつてるが、延曆四年（七八五）には既に伯耆に入つてゐたらしい。

安綱は確かな作品を今日まで傳へた最も古い刀工である。その今日に有名となつたのは恐らく田村麿と同時で此の武將がその作品を佩用し頼光はこれで大江山の鬼退治をしたといふ傳說が太平記によつて宣傳されたのに在るらしい。而して此の名刀は鬼切丸ともいふが又た童子切と呼び傳へて今轉傳して作州津山松平家の重寶となつてゐるといふ。

安綱の居處は太平記に會見郡大原五郎大夫安綱とし、系圖には横瀨三郎大夫となつてるのもある。今も大山の西麓日野郡吉壽村に大原といふ地名があり、日下（久坂）鄕に屬してゐる。此處に大原の地名があるのから推せば、大原氏の部落であつたらしい。但し大原に居たからこの氏を名乘つたとも考へられるが、大原といふ姓は姓氏錄に見えたもので、安頼安綱等の俘囚が他の安倍清原藤原三池等の姓を冒した如く名乘つたと考へられ、伯耆の大原といふ地名は彼等の一族の移住によつて起つたとするのが妥當と考へられる。

此の一族は天長から嘉祥の間（八二四乃至八五〇）に眞守、貞觀頃（卽ち九世紀後半）に眞綱などの名工を出し頗る盛んで、奥羽大和備前の名工と肩を並べてゐた。

從來は備前鍛冶の元祖實成を天曆（九四七乃至九五六）又は天延正曆間（九七三乃至九九四）、その子友成を寛和長和間（九八五乃至一〇一六）

にゐた備前の最も古い刀工としてるが、我々の隱銘で讀んだものには吉井の元祖とされた爲則が最も古く、

天長四年丁未春正月朔癸亥備前國沙石住人
俘囚臣爲則奉造之

とある。之に次いで舞草から移住した長船の有正正恒

貞觀六年甲申□月□日備前國長船住有正

更にその次に福岡の友成父子の

元慶元年(貞觀十九年)己巳正月朔丁巳備前
國福岡住人俘囚臣藤原友成奉造之

といふ順になつてゐる。天長四年(八二七)は實成を天曆としたのより更に百二十年古く、前に述べた播磨安賴父子に次ぐもので、吉井鍛冶の元祖爲則は從來の系圖に鎌倉時代の正和(一三一二)となつてゐて、隱銘から讀んだものに約五百年後れてゐる。自分の讀んだ此等の銘文には日の干支まで三正綜覽の干支と符合するので後世の末流刀工が追銘を切つたとは考へ難いやうである。又た上に掲げたものは何れも「於平安京大極殿賜之」といふ佩用銘を伴ひ、その人物も當時の公卿であるから、是れ又た疑を挿むべき點を認めぬ。故に將來或はより古い刀工を發見せぬとは斷言し難いが、恐らくは反對に此の年代より引き下げる必要は起るまいと信ずる。

備前刀工の居た處では今の鐵道沿線の萬富驛の附近吉岡が鎌倉時代以後に吉岡一派の住處として知れてゐるのみならず、最近に同村荒木誠一氏が村誌を編纂される際に調査されて、此處が古の沙石鄕に相當し、古備前鍛冶のゐた遺跡が數ヶ所發見され、鍛冶屋といふ大字にも一つ知れた。是によつて吉井の元祖とされた爲則が早く此處で鍛刀に從事したことが明かとなつた同氏は長船鍛冶は此處から移住したと考へられ若し然りとすれば國府が岡山市の北部から轉遷して鎌倉時代に福岡の東に徙つた頃に移住して大に榮えたものとされ得る。

後者は邑久郡行幸村の吉井川に沿うた平地に在つて、國府負郭の聚落たるは播磨小川と揆を

一にするも、その成立は遙かに新らしいのである。然れども福岡長船畠田等は何れも奈良平野の條里遺跡ある處に發達した垣内式村落の形式を有するもので、多少格子形の巷衢を成してゐるから推せば、その聚落の成立は鎌倉時代刀工の移住によつて繁榮する以前に在つたらしく、或は爲則一門に鼎峙して友成一派は最初から此處に居て、後に吉岡から有正正恒の一派も移住して長船に來たのでないかと想はれる。この近傍に服部土師などいふ部落があつて古く國守か郡司の官衙があつたので鍛冶機織陶工等の工人がその周圍に部落を造つてゐたと推測され得る。而して此等の刀工は皆な外來の部族俘囚たることは銘文に明記され、有正だけは舞草住と切つたのが貞觀五年まであつて、その子正恒は奥州太郎と呼び、貞觀頃に舞草から直接に移住したことが明かである。爲則はその作品と想はるゝ實物があつて安綱と類似してゐるのから推して播磨から來住したものと想はれ、實成友成は判然せぬが恐らくは同じく舞草からの直接又は間接移住者で或は安頼からの分派でなくて河内有成などゝ同派で、後世に秦包平が兩地を往來した如く早くから連絡があつたかと想はれる。

鍛刀工業が平安朝の前半に於て既に起り此等の地方に名工輩出の盛況を見たのは瀬戸内海に純友の起つた以前から海賊警備の必要があつて國府所在地に於て大に武器を製造した結果なるべきは疑を容れぬ。然れども此の場合にも原料鑛石が容易に得られるのと海上交通の便利なとが與つて盛大に發達したのである。永延前後から平安朝後半に至つて信房包平助平高平等の名工が出で奥州大和を凌駕せんとする更に盛大な工業となり、保元平治以後平安京が戰爭の巷となり、平家の西奔して瀬戸内海沿岸で戰爭が行はれるに及び彌倍發達し、鎌倉初期に後鳥羽上皇が諸國名工を召集して御番鍛冶を選定された時に平安京に集つたものゝ多數は備前鍛冶たるに至つたのは武器製造業の原因が具備してゐた結果であらう。

平安朝末期に入つて此の如く盛大となるに及んで備中國府の南で山陽の街道に當つた青江に移住し、此處でも工業が大に榮えて備前に亞ぎ京粟田口に肩を並べる盛況を呈し、安次の一家數人が御番鍛冶となつた。此の一門の住所は多分最初萬壽庄（今の倉敷町の北）の近傍に在つて、追々に備中の處々に分れたものらしく、岡山の永山氏の調査によつて五ヶ所も青江といふ場所が知れたが、地形圖には殆ど大字として殘つてゐぬ。備後の三原尾道等の海港に於ける鍛刀工業は更に晩くして、古三原と稱する正家正廣が南北朝の初期で、瀬戸内海沿岸の地方が群雄割據して敵味方となつて絶えず戰爭が行はれたる頃である。又た此の頃から八幡船が支那朝鮮の海上に出動し始めて、武器が海外に輸出せられるので需用が一層盛んとなり、室町幕府の朱印船を送り明國との貿易が開かる頃に重要輕出商品となつて終に大量生産と共に品位の低下を來すことゝなつた。

鎌倉時代の初期は今述べた如く備前に多數の名工が同時に出た時で、福岡に菊一文字として有名な則宗がその巨擘であつた。その子助宗助成助包助則等の外に、一門に延房信房信正が出で、尙ほ宗吉行國包道包助等もあり、長船に實經則次等が出で、吉岡鍛冶に是助が出で、同じく畠田に分れて守家が出で、その後に大宮鍛冶の國盛の末が宇甘（鵜飼）に移つて雲上雲生雲次の一門が出來、吉井鍛冶も續いて後に出雲道永の一派となつた。その後に長船の光忠長光兼光長義等の一門が鎌倉時代を通じて最も名工の名を博し、又た畠田の後が南北朝になつて長船の小反物となりその末流が則光祐光祐定となつた。

備前物は此の如く舞草物の發達したのと同じ徑路を取つて戰爭の近畿に起ると共に重もな武器供給の中心となり、多數の名工が出たのであるが、又た諸方に此の鍛刀工業の中心から移住したことも舞草鍛冶の場合と同じ樣である。何時も地方の名工は中心に召し出されたもので、大和朝廷へは舞草月山等から來て、終に大和に

定住したが、平安朝には又た諸國の鍛冶が京都に集り、播磨伯耆備前の鍛冶等は京都と鄕里の間を往來してゐたことが前に掲げた銘文から察せられ、所謂御番鍛冶が選定される以前から古く既に朝廷貴紳の御用を勤めることになつてゐたらしい。

然れども日本鍛刀工業の發達に重大な關係のある事件は御鳥羽上皇の番鍛冶を召集させられたことであつて、此の爲めに日本の鍛刀術の一大進歩があつたと認められる。番鍛冶に選定された名工には遠きは豐後の行平、備前から伯耆にも居た宗隆に及び、大和千手院重弘、粟田口國友一門に備前備中の多數の名工が參加したので、諸流派に別れて獨特の長處を發揮した鍛刀術の他流仕合が行はれて、上皇親裁の下に刀劍を造らせ給ふたのである。故に奈良平安兩朝の間に發達した長處が綜合比較された譯である。

此の間に於て獨り則宗だけが菊一文字の代表者となつてゐるのは福岡の祖先友成の燒き出した一種變化の最も面白い刄文にあつて、備前亂れの正しい系統を代表したのに在ると想はれる。今日は一般に此の一門のみが天下一の意味で菊一文字を切ることを許されぬとするが、一說には番鍛冶は何れも一文字を切つたとし、隱銘を見れば菊及び一文字を何れの番鍛冶も切つたことは疑ふ餘地がない。然るに此の如く則宗一門に限る如く考ふるに至つたのは後に述べる理由で他の番鍛冶の切つた菊と一文字は僞物扱にされた不幸な結果に因つたのである。隱銘にはまた手入れをした古い刀劍にも菊一文字を切つた形跡が明かで、當時上皇は政權の鎌倉幕府に移つたのを回收されるのに兵力に訴へねばならぬことを察し給ひ、十三年間武士を懷柔されると同時に武器を集められたことも一種の軍備擴張の御精神に出たと察せられ、勤王の武士に精良な武器を持たせて鎌倉幕府の武力を打破せんとする壯圖が原因となつてゐた。御所燒の刀で馬の首と手綱を一所に切つて落したといふ話が承久物語にある。從つて我々の手にする古刀には隱銘に澤山の一文字を切つたのがあつて、承元以

前の古作をも何れも承久當時に一院御用に選定され、それが「承久三年辛巳五月朔日賜之」といふ銘文を伴ひ、宮方の武士に配付されたことが知れて來た。

詳細に隱銘を讀んで明かとなつたのは番鍛冶の合作の多いことで、則宗その他の刀工の鍛へたものも燒いたものも仕上げ卽ち磨き上げたものが多い。從つて番鍛冶物には合作卽ち「合ひの子」の作風が普通で、粟田口と一文字と酷似することが從來の刀劍目利書に既に明言されてゐる理由は此の關係で理會される。又た從つて偶然備前鍛冶の合作で則宗助宗等の燒いたものだけを、後世鑑定家が姿、肌合、及文共に筋の正しい一文字と局限して考へることにもなつたと想はれる。

承久回天の事業失敗に歸した後に備前の國宗、助眞、粟田口國綱等の名工が鎌倉に招かれて鎌倉時代の中葉以後に相州物といふ正宗がその代表的名工とされた一派が發達して、今日では一般に正宗が鍛刀工業の新らしい紀元を開いた樣に考へられてる。然れども隱銘を研究して直に我々の氣付いたのは正倉院御物中の刀劍卽ち天平時代以前及び當時の作品たることの疑なきものと略ぼ同一の古物で、姿、地鐵、刃文等の類似したものが庖丁正宗と呼ぶものゝ中にもあるらしくなつて、今日疑雲に蔽掩された正宗の作品なるものは時代に於て頗る異つたものまでも含まれてゐることも疑なく、正倉院御物に比較する機會のなかつた時代の鑑定では敢て怪しむに足らぬが、今尙ほ鎌倉を過重視するのは如何であらうか。

兎に角鎌倉時代の鍛刀工業の發達には番鍛冶の鍛刀が正宗の出現よりは遙かに重大な意義あるもので、非常に華美な及文を呈して切味も無比な作品が此の他流仕合の時に出來たと考へてよい。且つ又た一時鎌倉幕府が中央政府たる狀態を呈しても、鍛刀工業の隆盛の要因は原料の豐富、交通の便利、戰爭の三つであつて、近畿中國九州等は鎌倉幕府の勢力の及び難い處で、南北朝から室町時代まで絕えず戰爭があり、又た

後には輸出向の需用もあつて備前を中心として益々盛運を呈し、それが天正年間の大洪水のために忽ち衰頽して再び起つ能はざるまで七百餘年間連綿と榮えた。

今茲に備前鍛刀工業の興亡を歷史的に辿つて聚落の人文地理學的考察の一端とするに當つて特に注意されるは地理的要因として氣候の聚落の成立と盛衰に重大なる關係あることである。今述べた天正年間の大洪水の記事は本朝鍛冶考の記事極めて簡單であつて且つ如何なる文獻によつたものかも不明であるが、洪水にて山崩れ夜中大河の堤崩れて長船町の人家鍛冶數千人溺死し、以來長船鍛冶衰えたといふ。此の地變は地形上で判斷すれば多分は吉井の北の邊の山が崩壞して一時河流を堰き止め再び破壞して長船近傍を荒らしたものと推測される。洪水の慘禍は獨り吉井川に止らず、中國一圓同樣で山陰側の濱田境等では一年間の降水量の最大が九月の低氣壓襲來の季節に在つて、山陽側でも六月梅雨季と九月との二回に最大がある。一昨年鳥取市が全滅したとの電報すら傳はつた洪水はその一例で山陰方面で鐵炮水と呼ぶさうである。

然れども今我々は長船が鐵炮水に遭られたといつて單なる茶話に滑稽化することは出來ぬ。その聚落の發達史上の意義は頗る重大で、播磨風土記に據れば奈良朝以前に讃岐から對岸の播磨への移住によつて出來た村落が記載されて、讃岐の側の人口の過剩が早く起つて、播磨の方が後れて開けたことを示してゐる。此の原因が何であるかは頗る明瞭で、讃岐の平野を流れる河流が何れも讃岐山脈から發源する水源地の灌域の小さい短いもので著しい洪水が起らぬに反し、播磨でも備前でも河流の水源の灌域が廣いので大雨が一時に降つて洪水を起す場合が頻繁にある。故に、讃岐の平野には人口密度が早く飽和狀態に達し、已むを得ず對岸へ移住して荒蕪地を開墾したものと推測される。藤田文學士の研究によれば播磨備前の沿岸地方では奈良朝前後に大和寺院の墾田として開發されて洪涵平

地の聚落が出來た例があるといふ。その未開墾地のあつたのも此の長船鍛冶の殆んど全滅したのも同一の地理的要因が働いた結果であつた。

今も尙ほ岡山縣には蘭の收穫の如き勞力の必要な時季に讃岐から渡つて來る勞働者の頗る多い事實があることを浦上宗衞氏から聞いたが、過去聚落發達の歷史には人口移動の潮流に色々の種類があつて、その一が鍛冶工業として此處に現はれ、その發達の根柢たる氣候の要因がまたその全滅を促すことになつたのは必しも偶然ではない。

阿波國勝浦郡羽ノ浦町附近のオルビトリーナ石灰岩とイノセラムス層

江原眞伍

予は昨春勝浦川盆地踏査の際同盆地の東端なる羽ノ浦町附近に於てオルビトリーナ石灰岩及イノセラムス層を發見せり、此の石灰岩は先に大築洋之助學士が日和佐圖幅說明書に中角より中ノ庄(羽ノ浦)に連續せりと記載したるものなり、然れども中角の石灰岩は鳥の巢系統のものなること明かにして中ノ庄のものとは全然其の層位を異にせり。

此の石灰岩は記者が勝浦川盆地に於て立川礫岩層と命名せる白堊紀層の基底礫岩(S. Yehara: On the Trigonia Sandstone group in the Katsuragawa basin, containing Ryoseki plants. *Jap. Journ. geol. and geogr. vol. III.* (印刷中、參照)に領石植物と共に介在するものにして兩者の間に密接の關係あり、然して此の石灰岩は黑色緻密にして時に鮞狀又は pisolitic の構造を示し檢